

教養教育英語科目におけるVELC Test[®]の導入と結果分析

Introduction of VELC Test[®] to the Liberal Arts English Courses and Analyses of Results

横内 裕一郎*、立田 夏子*

Yuichiro YOKOUCHI and Natsuko TATSUTA

要 旨

弘前大学の教養教育英語科目では、1年次必修科目として前期にListeningとReading、後期にSpeakingとWriting(週1回開講、90分)がそれぞれの50クラスあり、入学時の英語習熟度別(上級・中級・初級)に約40名の教員によって延べ200クラスが開講されている。(1)教員が異なること、(2)各クラスで使用している教科書が異なること、(3)評価方法やテストの形式が異なることなどが理由で、成績判定の信頼性や公平性に問題がある可能性があることから、2016年度より上記のすべての科目の成績判定に外部試験を導入することとなり、成績の20%分を外部試験の成績に基づいて判定することとなった。その後、2018年度より使用する外部試験がG-TELPからVELC Test[®]へ変更された。これは全入学者に英語プレースメントテストを導入することとなったことから学習への波及効果や費用対効果を総合的に勘案した結果である。本稿では、VELC Test[®]導入の経緯と2018年度入学者の成績推移並びに2018年度入学者と2019年度入学者の能力の比較結果を報告する。

キーワード：成績の平準化、プレースメントテスト、外部試験

学習者の能力を評価するためには、到達目標に則った授業を展開し、授業内容に沿った内容を用いて試験を行う必要がある。すべての学習者が同じ授業を受講し、同じ教科書を用い、同じ教員が同じ基準で評価がなされることが理想であるが、総合大学における語学教育ではこの理想を達成することは不可能である。したがって、できる限り統制された授業を実施し、統一試験を行うことで評価できるよう務める必要がある。しかし、統一試験の作成や運営には大きな手間がかかることと、2019年現在弘前大学教養教育英語科目では統一教科書を用いていないことから、本学で教員が統一試験を作成した場合、授業内容と試験内容や評価基準が異なる場合があることが想定されるため、実現できない。仮に統一教科書を用いたとしても、教員の専門や背景知識で授業内容に差が出ることは明確であり、実施上の困難点は残る。そこで、本学教養教育英語部門(旧英語ワーキンググループ)では、成績の一部に外部試験を導入することにより、一定の公平性を担保することを目的とした改革を行った。2016年度よりG-TELPを成績判定の一部とすることとしたが、問題内容が受験者にとって古めかしい内容であり、また上級と中級ではレベル3、初級クラスではレベル4のテストを使用していたことから内容に差があった。異なるテストを使用することで受講者の学習状況が把握しづらくなるだけでなく、卒業時の学生の質保証ができなくなる問題もある。さらに、初級向けに使用されていたレベル4の難易度が極めて低いという分

* 弘前大学 教育推進機構 教養教育開発実践センター

Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for Promotion of Higher Education, Hirosaki University

析結果が提示された（2016年9月13日開催英語部門会議資料；2017年3月15日開催英語部門会議資料）。そこで、2018年度より安価かつプレイスメントテストとして最速で結果の得るVELC Testを導入するとともに、成績判定に使用するテストをG-TELPからVELC Testへと変更した。

プレイスメントテストとしてのVELC Test

2017年度入学者までは大学入試センター試験の成績を用いクラス分けを実施していた。センター試験の成績は、学習者にとって十分に能力を発揮できた結果のものもあれば、そうでないものもあるが、基本的にすべての受験者が真剣に受験することが期待されるテストであることから、プレイスメントの材料として一定の信頼が置けるものであった。しかし、2021年より大学入試センター試験に代わり、共通テストと複数の外部試験が一次試験のスコアとして用いられることとなる（文部科学省, 2018）こと、そしてAO選抜による入学者が増えることから、統一した試験を入学前に受験する機会は減ることとなることが予想された。結局2019年11月1日に外部試験を入学者選抜の材料とする改革は延期された（文部科学省, 2019）が、今後継続的に外部試験の使用について検討が続けられることとなった。少なくとも、弘前大学に置いてAO選抜による入学者が増えることは変わらないため、今後大学入学共通テストの点数を頼りにしたプレイスメントを実施することは事実上難しいだろう。仮に外部試験をプレイスメントに活用したとして、複数のテストが入学の判断材料となるのであれば比較が困難である。外部試験を入学者選抜に活用する改革案が延期される前の計画では、入学者選抜に使用される各試験の成績をCEFRに換算し、そのレベルを大学に通達されることになっていたが、多くの学習者がA1かA2に振り分けられることが想定されるため、極めて大雑把なレベル分けとなる。従って、外部試験の結果をCEFRに換算した結果をクラス分けの判断材料として使用することは不適切である。外部試験を入学者選抜に使用する計画が進んでいた2016年に上記の懸念を払拭し、適切なプレイスメントテストを実施するために、横内（2017）は望月語彙サイズテスト（相澤 & 望月, 2010; 望月, 1998）をもとにしたプレイスメントテストの作成を試みた。しかし、実施後のクラス分けまでの時間的猶予の無さやマークシートや高精度のマークリーダーの導入といった費用の問題、そして問題漏洩の可能性から独自のプレイスメントテストの実施はほぼ不可能であると判断した。そこで、2018年度より成績判定に活用するとして導入が決定していたVELC Testをプレイスメントテストにも活用することとし、前期及び後期の第13週に実施する成績判定のためのVELC Testとの成果を比較することで、学習への良い波及効果が期待されると判断した。また、他の外部試験に比べ結果のフィードバックが早いことや安価であることなどから、複数の候補からVELC Testをプレイスメントテストとして導入することを決定した。

プレイスメントテストとしてのVELC Test：パイロットテストの結果

2017年度にプレイスメントテストとしてVELC Testがふさわしいものであるかを検証するため、212名を対象にパイロットテストを実施した。そのうち一部の分析は全受験者を対象に、また別の分析では、センター試験の成績が提出されている192名を分析の対象とした。パイロットテストは2017年6月に実施され、上級1クラス、中級6クラス、初級1クラスを対象に試験を実施した。そのうえで、センター試験の得点（リスニングスコアを含め200点に圧縮したもの）とVELC Scoreの相関分析を行った。さらに、受験者が割り振られていたクラスとVELC Scoreに基づくクラス分けをした場合のクラスでどの程度差が生じるかをクロス集計で検討した。

表1 VELC Testパイロットテストの結果 (N = 212)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min	Max	<i>SE</i>	95% CI
VELC 合計点	539.62	50.39	420	693	3.64	[489.24, 590.01]
VELC_L	540.45	63.19	317	747	4.56	[477.26, 603.63]
VELC_R	538.26	59.68	397	787	4.31	[478.57, 597.94]
TOEIC 換算点	501.07	70.16	240	700	5.06	[430.90, 571.23]
TOEIC 換算点_L	268.31	37.00	65	365	2.67	[231.30, 305.31]
TOEIC 換算点_R	232.76	36.68	145	350	2.65	[196.08, 269.44]

表1はVELC Testパイロットテストのスコアの平均値、標準偏差などを示した記述統計表である。VELC Testでは、結果がeポートフォリオと呼ばれるページでVELC ScoreとListeningパートの得点、Readingパートの得点とこれらをTOEICの得点に換算したスコアが提示される。静・望月 (n.d.) では、下記の式に従ってTOEIC換算点をそれぞれ計算している。

$$\text{TOEIC L} = -74.886 + 0.075 * L1 + 0.199 * L2 + 0.248 * L3 + 0.119 * R3$$

$$\text{TOEIC R} = -199.599 + 0.075 * L1 + 0.079 * L2 + 0.148 * L3 + 0.109 * R1 + 0.174 * R2 + 0.211 * R3$$

静・望月 (n.d., p.4)

これらの式から算出されたTOEIC換算点(合計点)の決定係数が68%と実用上十分な値であるとの報告がなされているVELC Test導入にあたってはこの換算点が大いに参考になった。後述のセンター試験の成績に基づくクラス配置とVELC Scoreによるクラス配分については、TOEIC換算点を用いたものでも実施し、VELC Scoreによるプレイスメントの結果とほとんど差はないため、導入にあたってはVELC Scoreを参考にクラス分けをすることとした(立田 & 横内, 2018)。そのうえで、センター試験の得点(記述式とリスニングの点数を200点満点に換算したもの)とVELC Scoreの相関を確認した。その結果、センター試験の得点とVELC Scoreの相関は $r = .807$ ($p < .000$)と極めて高く、VELC TestのTOEIC換算点との相関も $r = .746$ ($p < .000$)と高い相関が観測された。この結果から、VELC Testの得点に基づいてクラス分けを実施することの実現可能性は十分にあると判断した。

続いて、受験者のクラス割当とVELC Scoreに基づくクラス分けのクロス集計を行った結果、表1のようになった。5段階に分けた際、上級の学生が初級に落ちることはなく、初級の学生が上級に入ってしまう可能性は極めて小さいと判断したが、パイロットテスト実施時期が入学後2ヶ月経った6月ということもあり、能力に変動があったことや受験への真剣度を考慮するとパイロットテストとして使用する上で十分な情報量があると判断した。

表2 現行のクラス割当とVELC Scoreによるクラス配分 (5レベルの場合)

	VELC 上位	VELC 中上	VELC 中中	VELC 中下	VELC 下位
上級	4	11	8	7	0
中上	13	19	4	6	5
中中	4	11	19	18	3
中下	5	11	13	18	10
初級	1	1	8	4	9

Note. $\chi^2 = 56.66$, $df = 16$, $p < .00$.

上記の結果を検討し、2018年度以降の入学者にはVELC Testを入学直後に課し、教養教育英語科目のプレイスメントを行うこととなった。また、VELC Test実施後には従来のセンター試験によるクラス分

け方法とどの程度差が生じたかを検証し、対応が必要と考えられる学生に対しては個別に対応することとした。

2018年度プレイスメントテストの結果

2018年度からVELC Testによるプレイスメントが本格導入されることとなった。2018年度のプレイスメントテストは4月4日に実施され、各学部・学科ごとに指定された教室で3つの時間帯に分けて実施され、計1350名が受験した。周知が十分でなかったことから、数名の学生が受験しなかったが、これらの学生については、後日履修相談で面談を行い、クラス分けを実施した。

本研究では、医学部医学科の学生は特に能力が高いことが想定されるため、保健学科とは別枠として分析を行った。2018年度4月実施のVELC Testでは、医学部医学科のみが極端に平均点が高く（619.77）、その他の学部の平均点（517.76）に比べ100点以上平均点が高かった。一方、医学部医学科以外の学部間の平均点には大きな差がなかった（表2）。また、いずれの学科の成績分布を見ても、歪度は-0.13から0.23と小さく、尖度も理工学部で1.02とやや裾野が広い傾向にある一方、他学部・学科では0.28から0.76と正規分布に近い分布をしていた。なお、表2に記載の学部別成績はその後の分析の都合上、センター試験未受験者の成績は反映していない。2018年度のプレイスメントテストの最高点は農学生命科学部の学生が記録しており、医学部保健学科の学生も全体で2位の得点を記録していた。一方、平均点が高かった医学部医学科の最高点は713点と飛び抜けて高い結果とはならなかった。プレイスメントテスト導入にあたり懸念していた材料として、『実際に実力があるのに手を抜く学生がいるのではないか』という点があるが、high-stakesな入試（センター試験）に比べ、入学後のプレイスメントテストは、学生にとっては人生を大きく左右するテストではない、すなわちlow-stakesなテストであると考えられる可能性があることは否めない。例年のセンター試験英語の得点は、医学部医学科の学生の得点は他学部・学科の学生の得点に比べ高く、2017年度までのクラス分けではほぼ全ての医学部医学科所属の学生が上級か中級の中でも最上位のクラスに振り分けられていた。しかし、2018年実施のプレイスメントテストでは、上級以外のクラスに配属となった学生が27名、中級の中位レベルのクラスに配属となった学生も2名いた。

表2 2018年度入学者の学部別成績

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min	Max	95% CI
医医	111	619.77	40.32	532	713	[579.45, 660.08]
医保	204	541.16	42.05	422	739	[499.11, 583.21]
農生	219	515.52	51.29	349	754	[464.23, 566.81]
人文	274	529.61	49.60	330	668	[480.01, 579.22]
教育	171	500.92	46.12	366	661	[454.80, 547.05]
理工	371	501.59	51.22	339	641	[450.37, 552.81]

図1は表2の内容を図示したもので、縦軸のアルファベットはそれぞれMM = 医学部医学科、MH = 医学部保健学科、A = 農学生命科学部、H = 人文社会科学部、P = 教育学部、S = 理工学部を示している。図中の曲線は密度曲線である。医学部医学科のみややいびつな分布をしている。上述のとおり、医学部保健学科と農学生命科学部には実際には外れ値とみなすレベルで高い得点（700点以上）をとった学生がおり、その部分がわずかながら山を作っている。

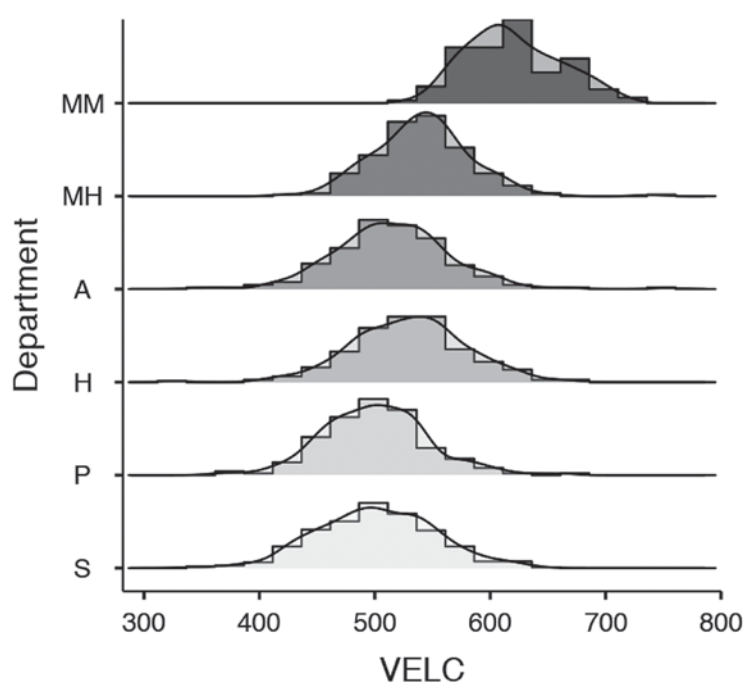


図1. 2018年度4月期学部別受験者のスコア分布.

プレイスメントテスト実施後、解答用紙をすぐにVELC Testの実施団体へ送付し、中2日で成績が提示された。その際に、本学教養教育開発実践センター教員の指示に従い、成績が良い順に各学生を52のクラスに配置し、4月9日にクラス分けの結果を掲示した。

2018年度の成績について、センター試験の得点とVELC Scoreの相関は $r = .788$ ($p < .00$)と2017年度に実施したパイロットテスト時に比べるとわずかに下がったが十分に高く、パイロットテストの結果及び考察を支持する結果となった。センター試験の得点に基づいた順位とVELC Scoreの順位を比較した結果、順位が300位以上下がった（センター試験における順位－VELC順位）学生が149名おり、逆に上がった学生は148名であった。

2019年度プレイスメントテストの結果

2019年度は、4月5日にプレイスメントテストが実施され、1361名が受験した。なお、今年度の欠席者は10名で2名からは事前に欠席の連絡があった。そのまま休学に入った学生を除き、2018年度同様、VELC未受験者は履修相談でクラス分けの対応を行った。

2019年度入学者の学部別成績

2019年度入学者の学部別成績は表3と図3に示す通りで、2018年度入学者の成績と比較しても見かけ上大きな差はなかった。なお、表3の情報は2018年の分析と同様、センター試験未受験者の情報は除外している。図3が示す通り、2018年度入学者に比べ、各学部で分布に変化が生じた。全体の平均点に大きな差はないものの、医学部医学科以外の平均点が前年度に比べお互い近くなった。また、医学部保健学科の標準偏差に注目すると、保健学科のみ標準偏差が小さめの傾向にあり、入学試験時の競争も厳しく、近い英語運用能力を持った学習者が入学してきていることが推察される。

表3 2019年度入学者の学部別成績

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min	Max	95% CI
医医	109	618.57	53.52	479	774	[565.04, 672.09]
医保	204	542.13	39.46	404	648	[502.67, 581.60]
農生	213	522.27	55.23	359	686	[467.04, 577.50]
人文	277	532.29	56.15	380	727	[476.14, 588.43]
教育	175	518.57	51.95	350	695	[466.62, 570.52]
理工	349	512.63	53.25	354	705	[459.38, 565.88]

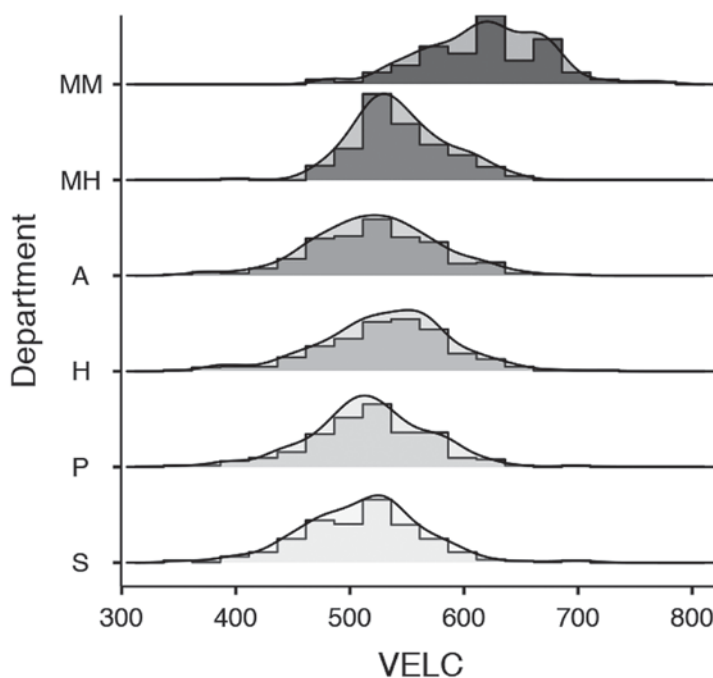


図2. 2019年度4月期学部別受験者のスコア分布.

2018年度同様、VELC Scoreとセンター試験の得点の相関関係を確認した結果、 $r = .787$ ($p < .000$) と十分な相関があった。一方、ケンドールの τ は .593 であり、順位で見ると中程度の相関にとどまることも明らかになった。しかしながら、2017年度のパイロットテストと2018年度、2019年度の結果を見る限り、プレイスメントテストにおいてVELC Testを利用した場合、センター試験の成績に基づいたクラス分けと相当近いクラス分けができている可能性が極めて高いと言える。

パイロットテストと2018年度の分析では詳細に検討していなかった項目であるが、2019年度は学部別に学生がどのレベルの教養教育英語科目を受講しているかを調査し、表4に提示した。上級は5クラス、中級は33クラス（ただし、1クラスは再履修クラス）、初級は12クラス設定されており、1クラスあたりの人数は30名程度になるよう調整している。それを踏まえて表4の内容を解説する。まず、上級クラスに割り当てられた学生の半数が医学部医学科の学生で、教育学部はやや人数が少ないものの、他の学部・学科からは15名程度上級クラスに選抜されたことがわかる。初級は329名のうち、3分の1が理工学部の学生で、母数も多いため一概に判断はできないが、入学後に特別なケアがひつような学生が多い傾向にあることがわかる。また、特に目を引くのが、2019年度入学者は、医学部医学科の学生3名が初級

クラスに配置されたことである。後日初級クラスになったことについて事情を確認した所、1名が「先輩に上級でなく中級クラスに入れるようアドバイスをもらい、手を抜いた結果こうなった」と話した学生がおり、今後そのようなことがないよう、対策を練る必要がある。なお、これらの学生は、後期開始時に前期終了時の VELC Score と担当教員の所見を参考に、上級もしくは中級クラスに移動することとなった。また、うち1名は単位認定制度を活用し、後期科目が認定された。

表4 2019年度学部別のレベル別受講生分布

	農生	人文	医—医	医—保健	教育	理工	合計
上級	16	16	68	15	7	11	133
中級	142	142	41	168	118	222	833
初級	63	63	3	21	53	126	329
合計	221	221	112	204	178	359	1295

2018年度入学者と2019年度入学者の得点比較

表5に2018年度入学者と2019年度入学者のプレイスメントテストにおける VELC Score を比較した結果を提示した。2019年度はクラス編成の都合上、上級を1クラス減らし、初級を6クラス増やした上、中級の一部をレベル共通の再履修クラスとしたため、各レベルの人数に差が生じている。一見すると、上級、中級、初級とも、平均点や標準偏差、最高点など年度ごとに大きな差はない。2018年度及び2019年度入学者の学部別平均点を比較した結果、VELC Score は教育学部と理工学部で1%有意水準で有意に差があり、2019年度のほうがやや平均点が高い結果となっている。全学の結果を比較した場合も1%有意水準で有意に2019年度入学者の平均点が高い結果となった。VELC Test はテストレットが等価されており、安定した結果を得られるが、多少の誤差は必ず生じる。したがって、10点の差に収まっている今回の結果からは、実際には差はないと判断してよいだろう (Appendix 参照)。

2019年度のセンター試験の成績に基づく順位と VELC Test の順位の差が著しく大きい (500位以上低下) 学生は42名おり、内訳は農学生命科学部8名、人文社会科学部7名、医学部医学科5名、医学部保健学科11名、教育学部5名、理工学部6名であった。また、300位以上下がった (センター順位—VELC 順位) 学生は142名だった。なお、本稿4ページ目下段に記した通り、2018年度は、センター試験の順位と比べ VELC Score の順位が300位以上下がった学生が149名であったことから、2018年度より2019年度は少なく減ったことがわかる。

表5 2018年度入学者と2019年度入学者の授業レベル別 VELC Score 比較

	2018年度						2019年度					
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min	Max	95% CI	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min	Max	95% CI
上級	136	631.74	39.80	601	754	[600.94, 662.55]	141	642.22	31.74	606	774	[610.48, 673.96]
中級	944	529.78	32.04	477	596	[497.74, 561.81]	889	541.76	29.14	493	606	[512.62, 570.90]
初級	249	445.14	25.78	330	477	[419.36, 470.92]	330	457.89	31.85	350	493	[426.04, 489.74]

まとめ

本稿では、弘前大学における教養教育英語科目のクラス分けのために導入されたVELC Testについて、導入の背景と2017年度（パイロットテスト）、2018年度、2019年度の結果を報告した。現状、プレースメントテストとしてVELC Testは十分に機能していると言えるが、実際に2019年度にあったように、自身の実力より下のレベルのクラスを受験しようとして手を抜く学生は今後も出てくる可能性がある。現状は後期から上級クラスや中級のクラスでも英語母語話者の教員が担当するレベルの高いクラスに移動するよう指導しているが、前期からも何らかの対応ができるよう検討する必要がある。今後、継続的にプレースメントテストとしてのVELC Testの結果を分析し、より正確でかつより教育効果が得られるテストであるかを検証する。

注釈

本稿の一部は、立田夏子、横内裕一郎. (2018). 大学教養英語教育におけるプレースメントテストの導入, JACET 57th International Convention, 2018年8月30日で報告した内容を含む。

引用文献

- 相澤一美・望月正道 (2010). 『英語語彙指導の実践アイデア集：活動例からテスト作成まで』東京：大修館書店.
- 静哲人・望月正道. (n.d). 『熟達度診断のためのVELC Test ～信頼性と妥当性を検証する～. Retrieved from https://www.VELC Test.org/contact/VELC Testdatosei_paper.pdf
- 立田夏子・横内裕一郎. (2018, 8月). 大学教養英語教育におけるプレースメントテストの導入. JACET 57th International Convention, 東北学院大学：仙台.
- 望月正道 (1998). 「日本人英語学習者のための語彙テスト」『財団法人語学教育研究所紀要』12, 27-53.
- 文部科学省. (2018). 『大学入学共通テストの枠組みで実施する民間の英語資格・検定試験について』 Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/28/1408564_1.pdf
- 文部科学省. (2019). 『大臣メッセージ（英語民間試験について）』 Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/other/1422381.htm
- 横内裕一郎. (2017). 「語彙サイズテストによるプレースメントの試み」『弘前大学教養教育開発実践ジャーナル』1, 43-52.

Appendix 2018年度・2019年度入学者の学部別平均点の比較

	2018 (N = 1350)					2019 (N = 1361)					t	p	d
	M	SD	Min	Max	95% CI	M	SD	Min	Max	95% CI			
農生 (N = 219; 222)	515.52	51.29	349	754	[464.23, 566.81]	522.21	55.47	359	754	[466.74, 577.69]	-1.315	.189	0.125
Listening	521.39	56.64	332	765	[464.76, 578.03]	530.14	64.48	348	770	[465.66, 594.62]	-1.513	.131	0.144
Reading	504.68	61.17	347	787	[443.51, 565.84]	518.46	60.82	315	679	[457.64, 579.28]	-2.373	.018	0.226
人文 (N = 274; 286)	529.61	49.60	330	668	[480.01, 579.22]	531.21	57.52	350	727	[473.70, 588.73]	-0.352	.725	0.030
Listening	533.49	57.05	332	676	[476.45, 590.54]	533.92	64.48	380	748	[469.44, 598.40]	-0.083	.934	0.007
Reading	522.17	60.59	314	697	[461.57, 582.76]	533.26	66.26	283	738	[467.00, 599.52]	-2.064	.039	0.175
医学 (N = 111; 112)	619.77	40.32	532	713	[579.45, 660.08]	617.91	53.58	479	774	[564.33, 671.49]	0.292	.771	0.039
Listening	618.21	51.38	533	743	[566.83, 669.59]	625.36	64.80	463	798	[560.55, 690.16]	-0.912	.363	0.122
Reading	633.79	54.65	517	787	[579.15, 688.44]	626.84	63.21	471	793	[563.63, 690.05]	0.878	.381	0.118
保健 (N = 204; 204)	541.16	42.05	422	739	[499.11, 583.21]	543.01	40.27	404	648	[502.75, 583.28]	-0.456	.649	0.045
Listening	540.79	50.67	404	743	[490.13, 591.46]	545.46	52.60	427	694	[492.86, 598.06]	-0.913	.362	0.090
Reading	538.31	52.35	423	787	[485.97, 590.66]	545.24	45.94	386	738	[499.30, 591.17]	-1.420	.157	0.141
教育 (N = 171; 178)	500.92	46.12	366	661	[454.80, 547.05]	517.34	52.64	350	695	[464.70, 569.97]	-3.093	.002	0.332
Listening	510.16	52.61	321	664	[457.54, 562.77]	520.54	60.03	369	748	[460.51, 580.58]	-1.716	.087	0.184
Reading	486.04	56.94	322	697	[429.10, 542.98]	517.43	59.75	315	679	[457.68, 577.18]	-5.021	.000	0.538
理工 (N = 371; 359)	501.59	51.22	339	641	[450.37, 552.81]	512.01	53.62	354	705	[458.39, 565.62]	-2.684	.007	0.199
Listening	507.08	56.27	332	691	[450.81, 563.35]	512.50	62.62	337	748	[449.88, 575.12]	-1.230	.219	0.091
Reading	489.83	59.78	322	697	[430.05, 549.60]	513.94	59.59	324	793	[454.35, 573.53]	-5.457	.000	0.404
全学 (N = 1350; 1361)	525.50	57.71	330	754	[467.44, 582.86]	531.77	59.69	350	774	[472.08, 591.45]	-2.935	.003	0.113
Listening	529.38	62.15	321	765	[466.91, 603.40]	535.16	68.25	337	798	[466.91, 603.40]	-2.302	.021	0.088
Reading	517.48	70.27	314	787	[447.22, 587.75]	533.18	66.87	283	793	[466.31, 600.04]	-5.955	.000	0.229